

旅行による「国家に対する態度」の変容について

—東南アジア寄港を中心とする兵庫県青年洋上大学の場合—

田中 國夫* 虎田 俊彦 小林 昭司

目 的

最近、政府はじめ多くの府県ならびに民間団体らの主権によって、「青年の船」「青年洋上大学」の名のもとに、一定期間、青年を海外に旅行させることが行なわれている。この種の団体旅行は、昭和43年に、政府主権の第一回「青年の船」が企画されて以来、盛んに行なわれるようになったようであるが、その目的は、各主権団体によって多少の相違がみられるにせよ、一般に、船内での講義・講習・団体訓練等による自己啓発と、寄港地における現地人との交流あるいは現地見学を通じて国際的な視野を広め、国際親善の面においても貢献しようとするところにおかれている。

しかしながら、これらの研修旅行が、その目的をどの程度果しているかということについての科学的な効果測定に関しては、ほとんど耳にしない。本研究は、船を利用した団体研修旅行に参加した青年たちが、各訪問国とその国民に対する態度をどのように変容させたかを明らかにし、こうした旅行の効果に関する一つの資料を提供しようとするものである。

国家認知の意味空間に関する解析では、田中靖政(5)の研究があり、また、外国旅行が国家認知におよぼす影響については、ヨーロッパを旅行した日本人旅行団を対象に調査を行なった山口茂嘉(7)の研究がみられる。

本研究は、それらの研究法と幾分異なったアプローチを用いているので、直接的な比較はできないが、得られた結果に関しては、比較検討を加え、この種のパイロット研究の一つに加えたい。

本研究が行われた場面

「兵庫県青年洋上大学」という名称のもとに、兵庫県下から選ばれた20才から25才までの青年401名(男219名女182名)が参加した。

昭和46年9月7日、スタッフ(47名)、講師(12名)、リーダー(20名)、その他あわせて合計475名が、英国船コーラル・プリンセスに乗り、神戸港を出航。マニラ(フィリピン)、シンガポール、ホンコン、キールン(中華民国)の各港を訪問し、同年9月29日、23日間の船旅を終えて帰国した。

日程、ならびに寄港地での主なプログラムは、次のとおりである。

- 9月7日 ◦ 神戸港出航(15:00)
- 12日 ◦ マニラ着(8:00)
 - 現地人ガイド付の観光バスで市内見学(10:00~12:00)
 - フィリピンの青少年50人を船に招いて交歓昼食会。日本側出席者は150人(14:00~16:00)
 - または、観光バスにて、市郊外見学ツアー(10:00~16:00)
- 13日 ◦ 12日に同じ、ただし参加メンバーは交替。マニラ発(18:00)
- 17日 ◦ シンガポール着(9:30)
 - 日本人ガイド付の観光バスにて市内および市外見学(11:00~18:00)
- 18日 ◦ シンガポール港務局グラウンドにて、卓球、バレーボール、ソフトボール柔道などのスポーツ交歓会を行なう。日本側約40人の出場者以外は、これ

*本研究には、大学院修士課程、小川さきも作業過程に参加した。

- らの試合を観戦（9：00～12：00）
- 現地青少年と船内にて交換会（12：00～12：45）
- 市内を班（10人構成）別に自由行動（14：00～20：00）
- 19日 ◦ シンガポール発（8：00）
- 23日 ◦ ホンコン着（8：00）
- 班別自由行動—現地見学など—（9：00～13：00）（14：00～19：00）
- ホンコン発（23：59）
- 25日 ◦ キールン着（9：30）
- 市内見学（13：00～18：00）または故宮博物院等を見学（12：00～18：00）
- 26日 ◦ 台湾造船所講堂にて、郷土芸能の相互披露（9：00～11：00）
- 以下25日に同じ
- キールン発（21：00）
- 29日 ◦ 神戸港着（13：00）

また航海中、船内において、訪問国の紹介や、東南アジアの諸事情に関する講義などが行なわれている。

このほか、特筆されるべきこととしては、船内研修用に編集されたテキストの中で、「台湾は、中華民国の一省で、中華民国政府の臨時所在地」と記述された箇所があり問題となったことがあげられる。

46年7月21日および22日付の朝日新聞によればこのため、問題の箇所の表現が改められることに決まり、テキストの回収も検討されたが、その後方針が一転、結局、訂正も行なわれないことに決定したという。

また、船上において毎朝「日の丸」の掲揚があり、その際、国歌「君が代」が、参加者全員によって歌われたことも、つけ加えておく必要があるだろう。

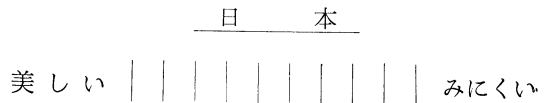
方 法

訪問国およびその国民に対する態度を測定するために用いたのは、次の3つである。

1. Semantic differential 法

これは、与えられた「概念」（すなわち、ここ

では、フィリピン、シンガポール、ホンコン、台湾、日本の5つ）が、両極に正反対の意味をもつ対形容詞を配した尺度上の、どの位置を占めるかを、被験者に評定させる方法である。

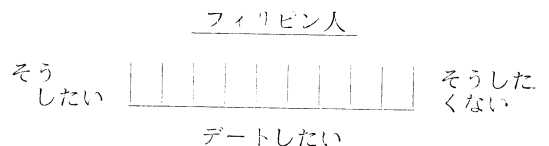


このたびの調査では、Osgood. et al. (1) および田中靖正政(5)を参考にしながら、われわれの研究にふさわしいと思われる独自の尺度を作成した。すなわち、船内で、しかも限られた時間内で評定が行なわれるという特殊な事情を考慮して、尺度の数を12とし、比較的日常生活よく用いられる形容詞の中から、評価次元に属すとされているものを主として選んだ。このように、国家認知における評価的側面にあえて重点をおいたのは、国際理解を深める目的で企画された今回の旅行のような場合、この点が特に重要であると考えたためである。なお尺度は、9段階のものを採用した。

2. Behavioral differential 法

これは、上に述べた Semantic differential 法の場合の形容詞対が、社会的行為を代表する動詞に置きかえられ、さらに、刺激語としての一般的「概念」が、「刺激人物」に限定されたものということができる。

Behavioral differential 法は、与えられた「刺激人物」に対する行為意図を測定する道具として、Triandis (6) が提唱したものであり、本研究においては、5つの「刺激人物」（すなわち、フィリピン人、シンガポール人、ホンコン人、台湾人、日本人）について、評定を求めた。



尺度作成にあたっては、Triandis (6) の見出した5つの因子、および田中靖正の検証した3つの因子を参考に、「信用したい」（社会的承認と服従）、「親友として受けいれたい」（交友的承

認)、「結婚したい」(結婚の承認)など14の社会的行為を選びだした。ただし、訪問国の国民に対する態度を測定するという観点から、表現を部分的に変更したり、より適切と思われる社会的行為におきかえたりしたうえ、「その人の国について、いろいろ尋ねたい」などのように、このたびの調査に限って想定可能な行為尺度をつけ加えたことによって、Triandis(6)ならびに田中靖政(4)の研究で用いられた尺度とは、若干異なる構成となっていることを、はじめにことわっておく。なお尺度は、Semantic differential の場合と同様、9段階のものを用いた。

3. 自由連想による態度測定法

これは、尺度によらない態度測定法として、Szalay, L.B. (2)らが、提案しているもので、方法としては、まず第一に、被験者に刺激語(すなわち、フィリピン人、シンガポール人、ホンコン人、台湾人、および日本人)を提示し、そこで1分間、それぞれの刺激語から、次々と想いうかぶところの単語をすべて用紙に記入させる。次に、そこで得られた反応語を次の3つのカテゴリー、すなわち、Positive な内包意をもつもの(Positive category) Negative な内包意をもつもの(Negative category) Neutral な内包意をもつもの(Neutral category)のいずれかに分類する。本研究では、2人の社会心理学専攻の大学院学生が、判定者としてこの作業にあたった。さらに、Szalay, L.B. (3)らの方法に従って重みづけを行なう。すなわち、別の被験者21名に対して、同じ5つの刺激語を提示し、同様に連想させた。さらに4日後再テストを行ない、再テストにおいて安定していた割合で重みづけの比率を決定した。

刺激語に対して最初に連想された反応語(第一反応語)についていえば、その再現率が50%であったので、5の重みづけが与えられたわけである。(表4参照のこと)

次に態度得点(EDI)の算出を行なう。態度得点は次の公式によって計出された。

$$\text{Index of Evaluation Dominance} = (\Sigma \text{ scores of positive responses} - \Sigma \text{ scores of negative responses}) / (\Sigma \text{ scores of all responses}) \times 100.$$

Szalay, L.B. (3)は、他の直接的な態度測定法によって測定されるものが、被験者の合理的理由にもとづく知的な立場とみることができのに対して、自由連想法という間接的な方法を用いて測定されるところのものは、実際の感情的、情緒的反応が反映したものであると述べている。

いずれにせよ、この方法は、手続が簡単なうえ、態度が測定されているという自覚を被験者にもたせない長所をそなえているといえる。

手 続

本研究の対象となった被験者は、「昭和46年第1回兵庫県青年洋上大学」に参加した青年男女401名の中から、ランダムに抽出された150名である。

この150名に対し、各国ごとに訪問前および訪問後の2回、同じ調査がくり返された。第1回の調査は、船が神戸港を出港した翌日および翌々日に行なわれた。被験者は、Semantic differential, Behavioral differential, それに自由連想の3種類の用紙を与えられ、5つの国およびその国民すべてについて、記入するように求められた。

2回目の調査は、それぞれの訪問国において、寄港地活動を終え、船がその国の港を出た翌日に行なわれた。ただし、「日本」および「日本人」については、一番最後に行なわれている。

なお、船酔い、その他の理由で、1回目と2回目の回答がそろわなかったため、結果において、被験者の数が、国別、測定法別にちがっていることをことわっておく。

結 果

1. Semantic differential 法

による測定の結果

回収されたデータをもとに、それぞれの概念(国)について、1回目および2回目の平均値を求め、セマンティック・プロフィールを描いたところ、図1—図5に示すような結果となった。(細線は、1回目、太線は2回目をそれぞれ表している。)またt検定の結果も図に示されているとおりである。

次にこれら12尺度の相互相関行列を求め、これを主成分分析法による因子分析にかけた。さらに

ヴァリマックス法によって軸を回転させたところ表1に示す結果となった。

第一因子に高い負荷量を示すものとしては、親切的な (.74) , 親しみやすい (.68) , 勤勉な (.65) などがあげられ、これらは、パーソナリティ・レベルでの評価的形容詞であるところから、第一因子は、パーソナリティ・レベルにおける評価と関連をもった因子と考えられる。また第2因子には、新しい (.86) , 自由な (.37) などがみられ一般的評価因子と名づけられた。

表1 国家イメージの因子分析

尺度	因子		
	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子
1 新しい—古い	0.04	0.86	-0.07
2 豊かな—貧しい	0.34	-0.01	-0.61
3 勤勉な—怠惰な	0.65	-0.23	-0.24
4 明るい—暗い	0.58	0.18	-0.54
5 親切的な—不親切的な	0.74	-0.02	-0.22
6 健康的な—病的な	0.36	-0.03	-0.62
7 自由な—束縛された	-0.01	0.37	-0.65
8 親しみやすい—親しみにくい	0.68	0.04	-0.14
9 美しい—みにくい	0.60	0.27	-0.30
10 活動的な—活動的でない	0.58	0.39	-0.16
11 幸福な—不幸な	0.17	0.11	-0.80
12 清潔な—不潔な	0.29	-0.02	-0.70
Total variance	23.51	9.94	23.74

図1 SD フィリッピン人のイメージ

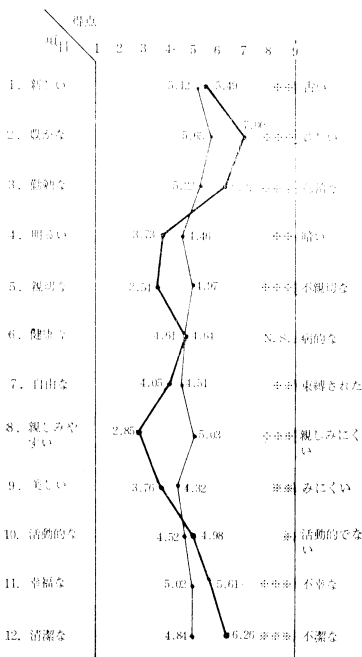


図6 BD フィリッピン人に対する行為意図

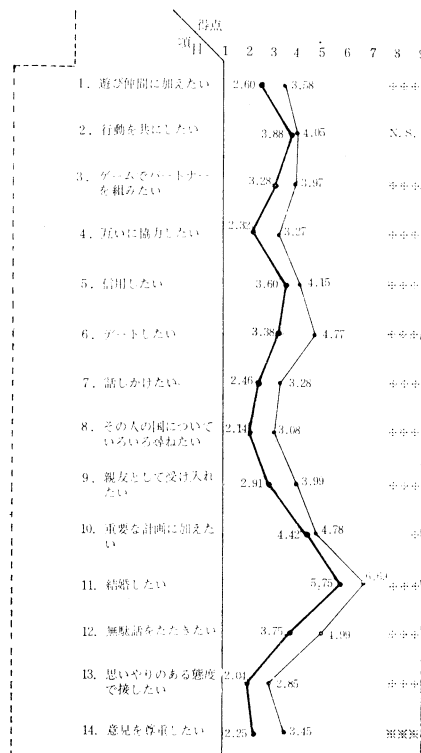


図2 SD シンガポールのイメージ

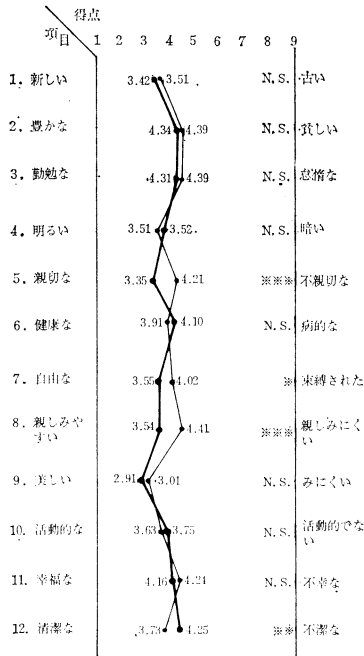


図7 BD シンガポール人に対する行為意図

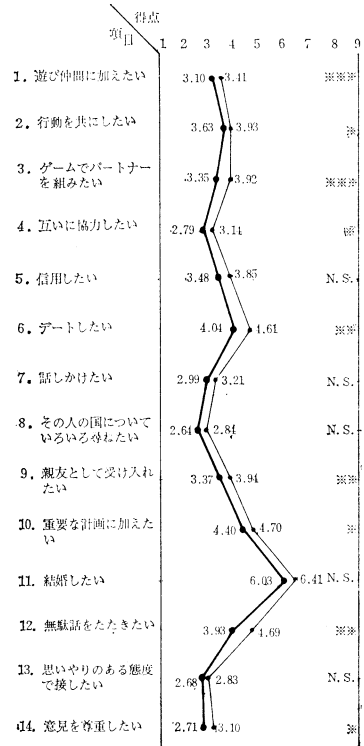


図3 SD ホンコンのイメージ

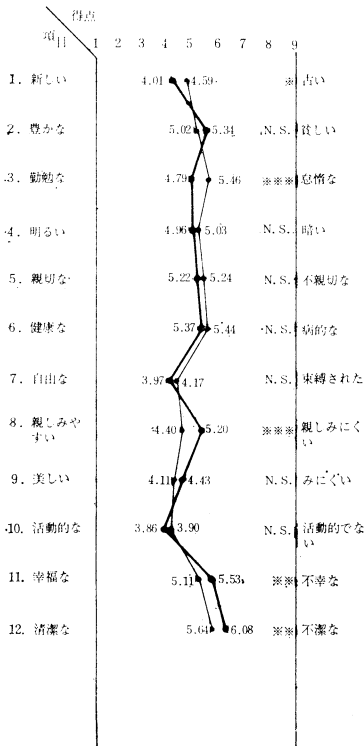


図8 BD ホンコン人に対する行為意図

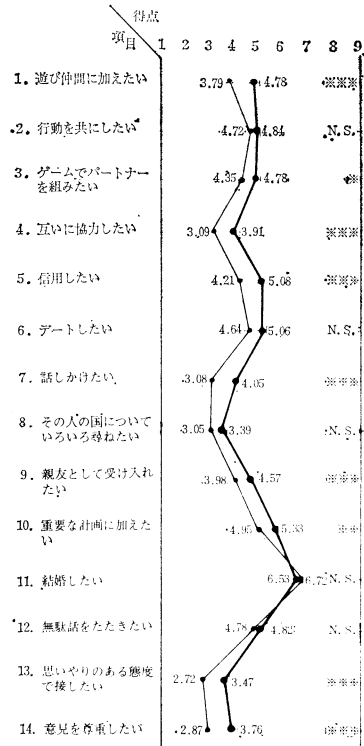


図4 SD 台湾のイメージ

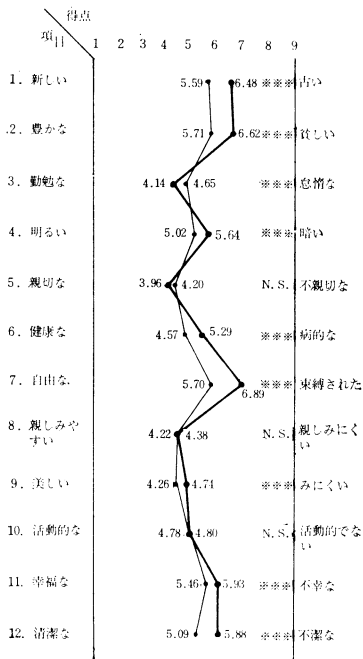


図9 BD 台湾人に対する行為意図

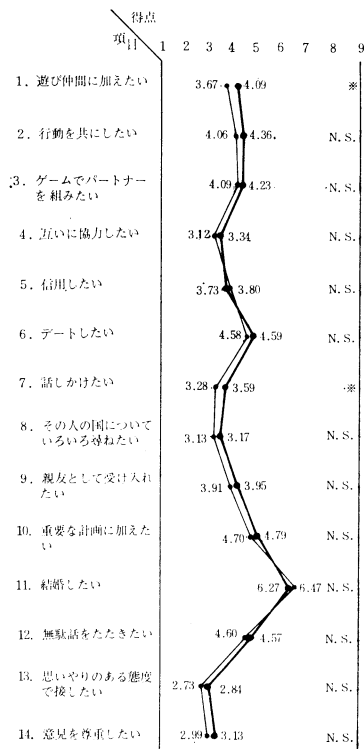


図5 SD 日本のイメージの変化

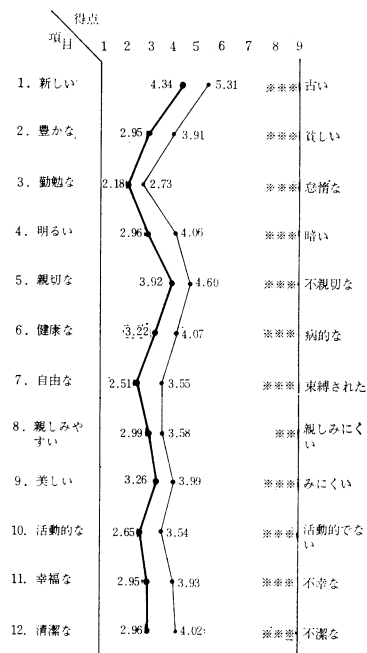
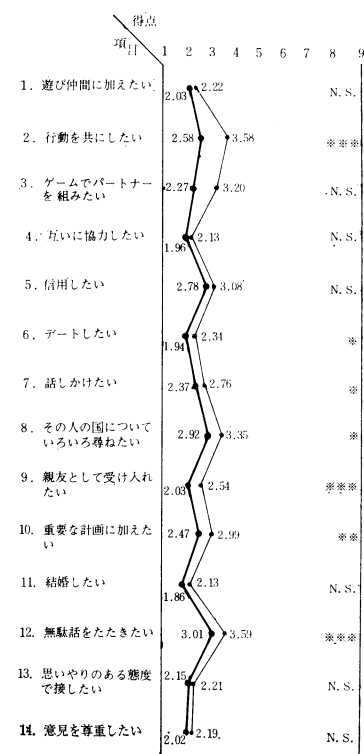


図10 BD 日本人に対する行動意図



2. Behavioral differential 法

による測定結果

Semantic differential におけると同様、各刺激人物（国民）別に、1回目および2回目の平均得点を求めた。図6—図10は、その結果を示している。

さらに、図11においては、それぞれの国民に対する態度得点（14項目の得点を合計し態度得点とした）の平均を示してみた。

また、同様にして、これら14行為尺度間の相関を求め、因子分析を行なったところ、表2に示すような結果を得た。

これによると、第一因子に、話しかけたい（.72）、ゲームでパートナーをくみたい（.68）信用したい（.66）、親友として受け入れたい（.63）という社会的、友交的承認の因子が見出され、第2因子には、結婚したい（.76）、デートしたい（.66）、重要な計画に加えたい（.62）、無駄話をたたきたい（.59）など、結婚の承認ないしは、親密な人間関係の承認を意味すると考えられる因子が発見された。

さらに、第3因子としては、意見を尊重したい（.76）、その人の国について、いろいろたずねたい（.70）、互いに協力したい（.67）などに代表される、一定の社会的距離を伴った交友関係の承認の因子を見出すことができた。

表2 国民に対する行為意図の因子分析

尺 度		第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子
1	迎ひ仲間に加えたい	0.43	0.44	0.37
2	行動を共にしたい	0.66	0.18	0.06
3	ゲームでパートナーを組みたい	0.68	0.36	0.06
4	互いに協力したい	0.29	0.30	0.67
5	信用したい	0.66	0.15	0.20
6	デートしたい	0.30	0.66	0.06
7	話しかけたい	0.72	-0.02	0.28
8	その人の国についていろいろ尋ねたい	0.11	-0.02	0.70
9	親友として受け入れたい	0.63	0.35	0.23
10	重要な計画に加えたい	0.22	0.62	0.27
11	結婚したい	0.21	0.76	-0.13
12	無駄話をたたきたい	-0.22	0.59	0.39
13	思いやりのある態度で接したい	0.57	-0.06	0.53
14	意見を尊重したい	0.24	0.19	0.76
Total variance		22.42	16.96	16.85

3. 自由連想による態度測定の結果

まず、はじめに、訪問前と訪問後における連想語数の差について調べてみた。

表3は、1人当りの平均反応語数を示したものであるが、訪問4カ国については、一様に増加を示している。

次に、先に述べた態度得点算出の公式に従って、各被験者の態度得点を求めた。

図12は、それぞれの国について、1回目と2回目の平均態度得点の変化を示している。

表3 自由連想法による反応語数の変化

刺 激 語	1 回 目 (訪問前)	2 回 目 (訪問後)
フィリピン人	10.4語	20.1語
シンガポール人	11.4	17.5
ホンコン人	13.1	17.9
台湾人	11.7	16.7
日本人	17.5	17.5

第11図 BD法による態度得点の各国民別変化

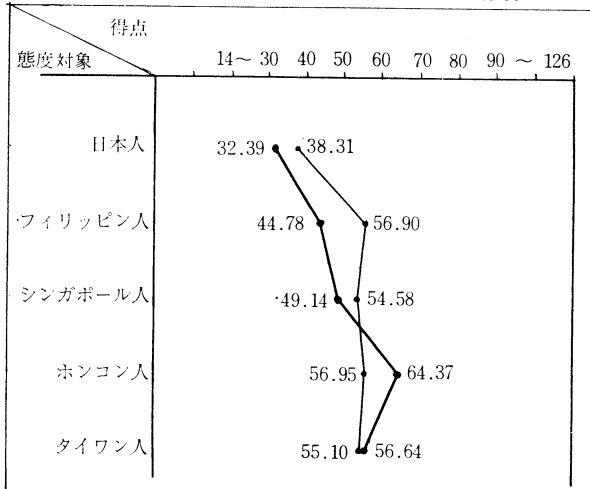
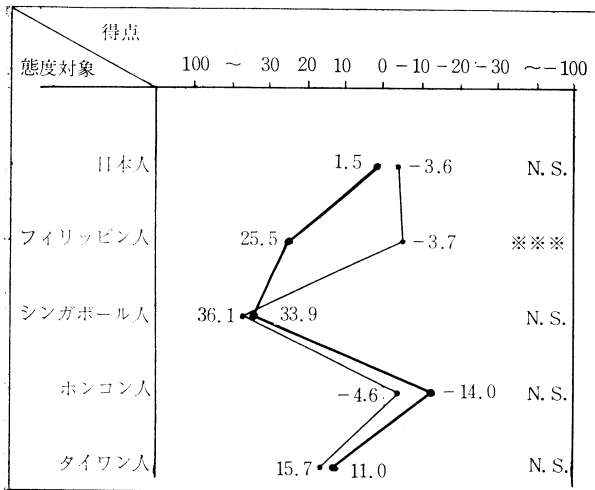


表4 自由連想法態度得点の重みづけ

	再現率	重み
第1 反応語	50.0%	5
2	45.2	5
3	35.6	4
4	24.0	2
5	19.2	2
6	20.2	2
7	8.7	1
8	9.6	1
9	10.6	1
10	6.7	1
11	2.9	0
12	1.9	0

第12図 自由連想法による態度得点の変化



考 察

ここでは、まず第1に、以上の結果を「訪問国およびその国民別」にまとめ、3つの測定法から得たデータを対比させながら、それぞれの国(国民)にみられる特徴を述べることにしよう。次に青年たちが示したこれらの態度変化が、一体何にもとづくものであるか、また、態度変化において各訪問国の間に認められる差異は、いかなる原因によって生じたものであるか、といった点に関して、推論をまじえながら検討してゆく。

まず、フィリピンの場合であるが、訪問先4カ国のうちでは、もっとも大きな変化が示されている。Semantic differentialの結果をみると、訪問前では概して中立的な反応が多かった*のに比べ、訪問後の測定では、「親しみやすい」「親切的な」など、パーソナリティ・レベルの形容詞尺度に、ポジティブ方向への大きな変化がみられる。他方「豊かな」「勤勉な」「清潔な」「幸福な」などの尺度においては、ネガティブ方向への変化があらわれている。

また Behavioral differentialの結果では、すべて一様に、ポジティブ方向に変化しているのが認められる。なかでも、「結婚もしくは親密な人間関係の承認」を代表する項目である「デートしたい」「無駄話をたたきたい」における変化が大きかった。

次に連想法の結果では、反応語数の増加が目される。すなわち、訪問前の測定では、10.4語と、他に比較して、最も少ない平均語数であったのが、訪問後は、20.1語と、ほぼ2倍にふえ、他のどの国よりも多くなっている。さらに態度得点(EDI)に関しては、訪問先4カ国の中で、唯一の有意差ある変化がみられた。

次に、シンガポールの場合に眼を転じよう。Semantic differentialに関していえば、大きな変化は、みられなかった。しかしながら、「親切的な」「親しみやすい」にポジティブな変化が、また「清潔な」にわずかながらネガティブ方向への変化が表われている。

Behavioral differentialの結果については訪問前と訪問後のプロフィールがほぼ平行する形で、ポジティブ方向に移動しているのが認められる。とくに有意差の認められたものは、「遊び仲間に加えたい」「ゲームでパートナーを組みたい」「行動を共にしたい」などとともに「結婚もしくは親密な人間関係の承認」を表わす項目—「デートしたい」「無駄話をたたきたい」であった。

また、連想法による測定(EDI)の結果では有意な変化はみられなかったが、反応語数が、フ

(*これは、精度度と関連しているように思われる)

フィリピンについて増加していることが指摘できよう。

ホンコンの場合は、Semantic differential に關していえば、やはり大きな変化はみられない。ただ12の尺度のうちで、もっとも差がみられたのが「親しみやすい」で、ネガティブ方向に変化しているのが興味をひく。ちなみに、訪問先4カ国のうちで、「親しみにくい」の方向に変化したのはホンコンのみであった。さらに、「清潔な」が、他の訪問先4カ国と同様にネガティブ方向に変化している。

次に、Behavioral differential の結果であるが全般的に、ネガティブ方向に変化したといえるだろう。なかでも、「遊び仲間に加えたい」、「話しかけたい」、「意見を尊重したい」、「信用したい」などの社会的、友交的承認の次元でネガティブな変化が大きいのが目立つ。

連想法の結果では、訪問前の反応語数が他の国に比べてもっとも多かったが、訪問後では、17.9とほぼ中位を占めるに至っている。

また、態度得点(EDI)では、有意な差は認められなかったが、-4.6から、-14.0へと、ネガティブ方向への変化をみせている。

次に、台湾の場合であるが、Semantic differential の結果をみると、「自由な」「豊かな」「新しい」「清潔な」「健康的な」「明るい」「美しい」「幸福な」などが、かなりの差をもって、ネガティブ方向に変化している。なかでも、「病的な」「暗い」の方向に有意に変化したのは、訪問4カ国のうちで台湾のみであったのは興味深い。また、パーソナリティ・レベルの形容詞では、「親切な」「親しみやすい」が有意差なし、「勤勉な」がポジティブ方向への変化を示している。

また、Behavioral differential の結果は、対人態度にほとんど変化が生じなかったことを示している。わずかに、「遊び仲間に加えたい」「話しかけたい」に、ポジティブ方向への有意な変化がみられるが、残りはいずれも有意差なしであった。

連想法の結果に関しては、訪問後の反応語数が4カ国中もっとも少なかったこと、そして、態度得点(EDI)では、有意差は見出せなかったけれども、ホンコン同様、ネガティブ方向への動き

をみせていることなどが指摘できるであろう。

次に、日本の場合について述べてみよう。

Semantic differential の結果は、1回目、2回目いずれの調査においても、12尺度すべてを通じて、ポジティブな評価(得点が5以下)がなされている。そして、すべて有意にポジティブ方向への変化を示した。これは、山口茂嘉の結果と一致しており、外国旅行は、自国への態度をポジティブの方向に変えるという法則を定着せしめるように思われる。われわれの調査で、とくに差が著しかったものは「明るい」「清潔な」「自由な」「幸福な」「新しい」「豊かな」などであり、パーソナリティ・レベルの形容詞である「勤勉な」「親しみやすい」「親切な」は、いずれも差がわずかであった。

また、Behavioral differential の結果は、概して、ポジティブ方向への変化を示しているが、その差はかならずしも大きくはない。しかし、他の国民に対する態度と比較して、もっともポジティブな態度が表われているのが、注目される。

連想法による測定の結果については、平均反応語数が、1回目、2回目とも同数であったのが、他の訪問4カ国と比べて、きわめて対照的であった。なお、態度得点(EDI)でも、ポジティブ方向にわずかに変化しているが、有意な差は見出せなかった。

以上みてきたように、被験者が示したそれぞれの態度対象における変化は、きわめて多様性に富んだ形で、各尺度上に示されている。したがってこれを一言で論じることは、困難であるが、ここでいくつかの共通点ないしは傾向を指摘することはできるであろう。

その一つは、日本を除く訪問先4カ国の Behavioral differential, 1回目の調査結果において、非常に類似したプロフィールが描かれていることである。このことは、1回目の調査時点において、「東南アジア人」に対する共通の対人態度が形成されていたと考えるべきであろう。しかしながら訪問後の調査結果をみると、ポジティブ方向(フィリピン、シンガポール)、ネガティブ方向(ホンコン)、そして、変化なし(台湾)の3とおりの変化が示されているのである。しかも、これらの変化の方向は、Semantic differential における

「親切な」「親しみやすい」によって表わされるパーソナリティ・レベルの評価の因子項目に示された変化の方向と一致していた。このことについて、断定的な表現はさし控えるが、国家認知と、その国民に対する対人態度との関係を探るうえで一つの参考となるであろう。

では、次に、外国訪問によって、なぜこのような態度変化が生じてくるのか、その原因について考えてみることにしよう。

まず、第一にいえることは、自分の眼や耳で、直接見たり聞いたりすることによって、その国（態度対象）に関する「新しい情報」が付加された、ということである。これは、別の表現をすれば、いわば「認知のずれ」とでもいうべきことであり、「コピーの世界」から「現地の世界」に足を踏み入れたときに受ける、ある種の衝撃によって引き起されるころの態度変化といえるかもしれない。しかしながら、このたびの旅行においては、観光バスのガイドの解説が、「新しい情報」の主な入手先であったということは、今後こうした旅行企画をたてるうえで、一つの考慮されるべき問題点を含んでいると考えられる。

第二に、今述べた「新しい情報の付加」過程の特殊なものとしての、「現地人との対人接触」があげられる。この対人接触については、友好的なものと、そうでないものの2つに分けることができる。友好的なものとしては、公式のプログラムでみる限り、フィリピンにおける現地青年との交歓会、シンガポールにおけるスポーツ交歓会と、それらに付随しておこったところの個人レベルでの相互コミュニケーションがあげられ、これら両国民に対する対人態度（Behavioral differentialにおける態度得点）は、いずれも、ポジティブな変化をとげている。これに対して、このような行事や活動の機会がもたれず、現地人との積極的な関わりの少なかった、ホンコン、台湾では、ネガティブ方向への変化、もしくは無変化という結果が出ているということは、きわめて示唆的であるといえよう。とりわけ、ホンコンでは、市内見物と買物に時間の大半が費やされており、現地人との交歓をはかる公的行事が一切行われなかったことに加えて、観光地などで、観光客を相手に金銭を乞い、あるいは強要する一群の人々にとりま

かれるといった特異な体験をしたことが、ホンコン人に対するネガティブな態度変化の一因として解釈されよう。

その他、船内での研修講義における告知的、あるいは説得的コミュニケーションや集団に対する同調傾向なども、態度変化を促した重要な要因として考えなければならないだろう。

最後に、日本および日本人に対する態度の変化についてであるが、外国旅行によって自国に対する態度が、ポジティブ方向に変化するとすれば、それはいかなる原理にもとづくものであろうか。これに関しては、今後の研究をまたねばならないと思われるが、自らが外国を訪れることによってそれらの国々に関する多くの生々しい情報を入手し、それらをもとに、自国および自国民である「日本」と「日本人」を、何んらかの意味において再評価したことだけは確かなようである。それは「豊かな」「幸福な」「明るい」「清潔な」など、日本の経済成長の再認識を示す形容詞対にポジティブ方向に変化したことに顕著に示されている。さらに今回の旅行においては、外的条件によって隔離された集団生活をおくることによって高揚されるところの連帯意識が、参加成員から日本人全体へと一般化され、それゆえ日本国との同一化が一層強調されたのではないだろうか。Behavioral differentialの結果において、「行動を共にしたい」「ゲームでパートナーをくみたい」の2項目において、1回目と2回目の測定値の差が、もっとも著しかったということが、そのことを暗示しているように思われるのである。

要 約

本研究は、第1回兵庫県青年洋上大学に参加した青年たちが4つの訪問国（フィリピン、シンガポール、ホンコン、台湾）および自国（日本）に対する態度、そしてそれぞれの国民に対する態度をどのように変容させたかを明らかにし、この種の旅行の効果に関する一つの資料を提供する目的で行なわれた。

国家（フィリピン、シンガポール、ホンコン、台湾、日本）に対する態度は、Semantic differential法（12形容詞対、9段階尺度）によって測定を行ない、また国民（フィリピン人、シンガポー

ル人、ホンコン人、台湾人、日本人) に対する態度は、Behavioral differential 法(14項目、9段階尺度) および自由連想法によって測定を行なった。被験者は、洋上大学に参加した青年男女401名の中からランダムに150名抽出した。第1回の調査(各国訪問前)は神戸港出港の翌日、翌々日に行ない、第2回の調査(訪問後)は、各国の寄港地活動を終え、その国を出港した翌日に行なった。

各国家および国民に対する態度変容の結果を比較検討し、考察した。主な結果は次のとおりであった。

- 1) SD法およびBD法は、尺度の意味空間を明らかにするために因子分析にかけた。SD尺度については、第一因子にパーソナリティ・レベルの評価の因子、第二因子に一般の評価因子をBD尺度については、第一因子に社会的・交友的承認因子、第二因子に結婚の承認ないしは親密な人間関係の承認因子、第三因子に社会的距離を伴った交友関係の承認因子を見出した。
- 2) 第1回目のBD尺度は、訪問先4カ国について、非常に類似したプロフィールをもち、「東南アジア人」に対する共通の対人態度が形成されていたことを示した。
- 3) フィリピン、シンガポールは、対人態度において、全体的なポジティブ方向への変化があり連想法による反応語数の大きな増加、そして態度得点の有意なポジティブ方向への変化を見た。これは、現地人との積極的な対人接触があったためと考えた。特にフィリピンは変化が著しく公式プログラム以外の個人レベルでの相互コミュニケーションの結果であったと考えた。
- 4) ホンコン、台湾は、対人態度においてネガティブ方向への変化あるいは無変化であった。これは、寄港地活動の中に積極的な関わりをもつ企画がなかったためと考えた。
- 5) 国家イメージの変容はさまざまであった。フィリピンの「豊かな」「幸福な」「清潔な」のネガティブ方向への変化、シンガポールの「清潔な」のネガティブ方向への変化、台湾の「自由な」「豊かな」「健康的な」「明るい」「幸福な」「清潔な」のネガティブ方向への変化、ホンコンの「幸福な」「清潔な」のネガティブ

方向への変化は著しかった。

- 6) 日本の国家イメージ、対人態度ともにポジティブな評価をし、ポジティブ方向への変化を示した。とくに「豊かな」「自由な」「幸福な」「明るい」など経済成長の再認識は著しかった。これは、山口茂嘉(8)の結果と一致しており、外国旅行は、自国への態度をポジティブ方向に変えるという法則を定着せしめるものと考えた。

参 考 文 献

1. Osgood, C.E. et al., The measurement of meaning, Univ. of Illinois Press, 1957
2. Szalay, L.B. & Brent, J., The analysis of cultural meaning through free verbal associations, J. Soc. Psychol., 1967, 72, 161—187
3. Szalay, L.B. et al., Attitude measurement by free verbal associations., J. Soc. Psychol., 1970, 82, 43—55
4. 田中靖政, Behavioral differential 法を用いた社会的態度の行動要素の分析, 心理学研究, 1966, 37, 2, 104—108
5. 田中靖政, コミュニケーションの科学, 日本評論社, 昭45
6. Triandis, H.C., Exploratory factor analysis of the behavioral component of social attitudes, J. Abnorm. Soc. Psychol., 1964, 68, 420—430
7. 山口茂嘉, 外国旅行が国家認知におよぼす影響について, 日本心理学会第35回大会発表論文集, 1971, 695—696